

『文化財と技術』

第7号

＜特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり＞

- 第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり
- 鈴木勉 三角縁神獸鏡製作地論と古墳時代研究
- 前田亮 技術と継承 ―その繋がり―
- 福井卓造・鈴木勉 ヤマト王権と地域王権の確執
―遅らされた技術移転「冶鉄技術」―
- 上柁武 岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論
- 李東冠・武末純一 百済の鉄と製鋼技術に関する試論
―梯形鑄造鉄斧を中心に―
- 金跳咏 東北アジアにおける鉄器文化の到来と限冶供鉄政策
- 鈴木勉・金跳咏 新山古墳・大成洞古墳群 88 号墳出土
金銅製帯金具などの円文たがね
- 第二部 古代東アジアの装飾技術
- 沢田むつ代 古墳出土の鉄刀と鉄劍の
柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例
- 金字大 新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷
- 李漢祥 皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地
- 金跳咏・鈴木勉 皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について
- 鈴木勉 朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15～19
- その 15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文
―藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて―
- その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは
- その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の
環部製作工程」への批判
- その 18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し
- その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の
製作技術の疑問
- 第三部 復元研究報告
- 鈴木勉 群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6
- 4 新羅の出字形冠 その 2
- 5 林堂洞 7 A 号墳金銅製冠
- 6 林堂洞 7 C 号墳金銅製冠
- ＜付録＞
- 鈴木勉 三角縁神獸鏡の仕上げ加工痕と製作体制
(『河上邦彦古稀記念論集』2015 年より転載)

『文化財と技術』第7号 目次

<特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり>

第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり

三角縁神獸鏡製作地論と古墳時代研究	鈴木 勉	5
技術と継承 —その繋がり—	前田 亮	10
ヤマト王権と地域王権の確執 —遅らされた技術移転「冶鉄技術」—	福井卓造・鈴木勉	32
岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論	上 梶 武	40
百済の鉄と製鋼技術に関する試論 —梯形鑄造鉄斧を中心に—	李東冠・武末純一	63
東北アジアにおける鉄器文化の到来と限冶供鉄政策	金 跳 咏	78
新山古墳・大成洞古墳群 88号墳出土 金銅製帯金具などの円文たがね	鈴木勉・金跳咏	101

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金 宇 大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李 漢 祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その15～19	鈴木 勉	205
その15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々字文 —藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて—		
その16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		
その17 李漢祥「陝川玉田 M3号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		
その18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1号出土大刀のうろこ文の打ち出し		
その19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1号墳出土飾履の製作技術の疑問		

第三部 復元研究報告

群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6	鈴木 勉	223
4 新羅の出字形冠 その2		
5 林堂洞7A号墳金銅製冠		
6 林堂洞7C号墳金銅製冠		

<付録>

三角縁神獸鏡の仕上げ加工痕と製作体制 (『河上邦彦古稀記念論集』2015年より転載)	鈴木 勉	233
---	------	-----

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金宇大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李漢祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その15～19	鈴木勉	205
その15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文 －藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて－		205
その16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		208
その17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		210
その18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し		214
その19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の製作技術の疑問		217

朝鮮半島三国時代の彫金技術 その16
天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは

鈴木 勉

<根岸塾塾生からの質問>

図1は、百濟の故地で天安龍院里1号墳（忠清南道 天安市 東南区 城南面 龍院里）で出土した大刀の写真です。外環を見ると金の痕迹が見えます。この技法は、韓国では「金板圧着技法」と言っていますが、本当でしょうか。その金板に、小さな穴が見えますが、これは何でしょうか。先に挙げた陝川玉田M3号墳出土大刀（図2）の外環の金の技法との関係を知りたいです。（印刷では金と銀の区別がつかないので、白い矢印で示します）

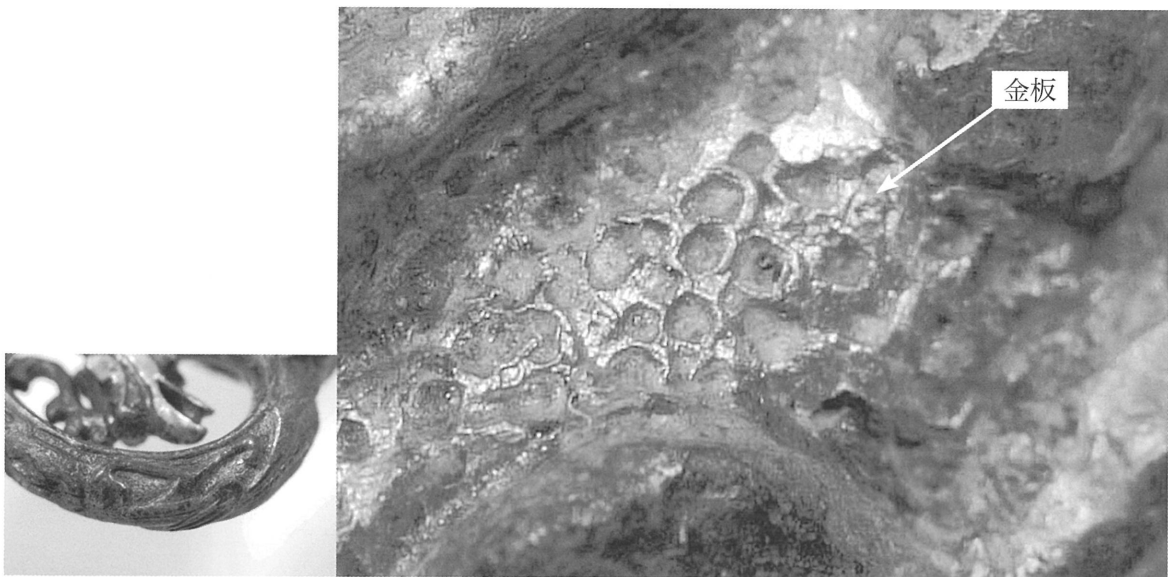


図1 天安龍院里1号墳で出土した大刀



図2 玉田M3号墳の龍文装環頭大刀の環頭の部分1

<解説1>

天安龍院里の環頭は「金板圧着技法」であるかもしれません。「圧着」であれば、近現代の日本の金工技法でいう「布目象嵌（ぬのめぞうがん）」という技術に近いものです。

写真を見たところでは、「薄い金板が銀の環頭に接着されている」ように見えますが、薄い金板をどのように接着（接合）したかが、技術史上は重大な問題です。接着（接合）の方法には、限りなくたくさん技法が考えられます。その一部として考えられるものを以下に示します。

- <技法1> 漆や膠を塗って、そこに薄い金板を置いて接着する技法
- <技法2> 水銀を塗って、そこにとても薄い金板を置き、水銀を蒸発させて接着させる技法
- <技法3> 環頭の銀の面をたがねで荒らしておいて（小さい穴は、そのたがねの跡である可能性があります）、そこに薄い金板を置き、上から木のたがねや鹿角のたがねで軽く叩くと金板が留まります。近現代では布目象嵌という一種の象嵌技法です。
- <技法4> 薄い金板を平滑な外環の上に置き、その上から鉄製のたがねを下の外環の地が凹むまで打ち込むと、金が外環に食いつく。そうして金板を留める技法（小さい穴は、そのたがねの跡である可能性がある。）

<技法1>は有機物の接着剤を使った「接着」、<技法2>は、一種の「鍍金」、<技法3>は「布目象嵌」とも言い、<技法4>も「布目象嵌」の一種です。<技法3>と<技法4>は、広い意味で「圧着技法」と言えるでしょう。

この天安龍院里の外環の技法は、<技法1>から<技法4>まですべての可能性があります。いずれにしろ、古代にはとてもめずらしい技法ですので、観察だけでは断定できません。観察推定法は危険な研究方法です。ですから、他の研究者の「金板圧着技法」という観察推定法による判断を信用してはいけません。しっかり再現実験をして、どのような技法が使われたかを求めて行くべきです。それを「検証ループ法」と言います。根岸塾でもっとも強くみなさんに教えた研究方法です。また、保存科学室にほとんど装備されている解析装置で水銀が含まれているかどうか確認する必要があります、水銀があれば、圧着ではなく鍍金になるでしょう。

図2は玉田M3号墳出土環頭大刀ですが、これにも部分的に金板が使われています。図をよく見ると、金板の縁がたがねなどで押さえ込まれているように見えます。これだけ長い間接合を保持しているのですから、<技法1>のような有機物を使っているとは考えにくいので、おそらくは近現代の「布目象嵌」に類似した方法で下地の凹凸で金板を保持しているのではないかと思います。

文化財と技術 第7号

2015年12月1日 印刷

2015年12月1日 発行

編集	鈴木 勉
発行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉 東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷	千葉刑務所 千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)